

<b>Title</b>	賀川豊彦試論 : その信の世界を中心に
<b>Author(s)</b>	鵜沼, 裕子
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 9(2): 1-15
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=629">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=629</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 賀川豊彦試論

—その信の世界を中心に—

鷓沼裕子

## A Study of Toyohiko Kagawa's Concept of Faith

Hiroko UNUMA

Toyohiko Kagawa's concept of faith is based on a somewhat mystical experience that occurred in his youth. Because of profound physical and spiritual agony, he once tried to commit suicide but was restored to "life" through this mystical experience in which he saw, he says, a mystical power of Life. This gave him the belief that the Cosmic Life he felt within himself also controls the entire universe. He called this power "Deity as Life."

The power of the deity reveals itself as love, and Kagawa found its complete revelation in the life of Jesus, especially in his acts of redemptive love. This led him to live a life in imitation of Jesus.

Kagawa's concept of Christian faith may differ somewhat from that of ordinary Protestants, but his thought and life should be evaluated for their uniqueness and originality in the history of Japanese Christianity.

### はじめに

賀川豊彦（1888-1960）に関する研究は、没後三十年以上を経過した現在も、なお脈々と続けられている。賀川にたいする大方の関心は、これまで、ある意味で当然のことではあるが、主として労働運動などを中心とする社会的実践家としての側面に注がれてきた。それに比して、彼のキリスト教信仰の世界そのものに関する研究は、それらに見合うほど十分になされてきたとはいえないように思われる。しかしながら、彼がキリスト者であり、その実践活動がキリスト教信仰に根ざしたものであったとすれば、それらの解明は、活力源としてのキリスト教信仰にたいする総体的な理解を軸としてなされるべきであろう。そのさいにわれわれが心せねばならないことは、神やキリスト、聖霊など、キリスト教の基本的な用語も、賀川の世界では、必ずしもプロテスタント世界の通念に

---

**Key words;** Toyohiko KAGAWA, Protestant Christianity, Cosmic Life, Vitalism, Redemptive Love

従って用いられているとは限らないということである。たとえば、賀川の社会活動はキリストの贖罪愛の実践であったといわれるが、彼のいう「贖罪」の意味は、正統プロテスタント主義における、神の子キリストによる人類の罪の贖いという受け止め方とは、いささか理解の仕方を異にしているように思われる。本稿の意図は、主として彼の代表的な著作とされるものを中心に、そのキリスト教世界のありようを少しく探ってみることにある。実践面における彼の稀有な遺産は、動機としてのキリスト教信仰との内的関連から光をあてることによって、その固有の性格や意義が一層明確になるであろうし、問題点の指摘もまた、そうした作業の上になされるべきであると考えからである。

## 1. キー概念としての「生命」

およそキリスト教界に限らずさまざまな分野に名を残した人々の中で、賀川豊彦ほど活力に溢れる生涯を送った人物は稀であると言っても決して過言ではないであろう。神戸新川のスラム街に住み込んでの救貧活動に始まり、労働組合運動、農民組合運動や、海外にまで及ぶ伝道などに八面六臂の活躍をする一方、多くの分野にわたる多数の書物を読破して、創作や翻訳を含む膨大な数にのぼる著書を残した。しかもそうした多彩な活動は（個々の業績そのものにたいする評価は暫く措くとしても）、外向的に拡散する仕方ではなされたものではなく、すべて彼のいうキリストの「贖罪愛」の実践という動機に発したものであった。加えてこれらの働きが、肺結核や眼疾など、ときには死に直面し、失明の恐れに脅かされるほどの病苦との戦いの中でなされたことを知るとき、人はその不屈のヴァイタリティーにまさに瞠目せざるを得ないであろう。そして、彼をして寸暇をも無為に過ごさせることなく、ひたすらただひとつの目的に向かって駆り立て続けたものは何であったのか、その秘密を知りたいという思いにとられるのではなからうか。

ところで、いずれのキリスト者であれ、その内的世界に少しく立ち入って考察するならば、そこには、一口にキリスト者として括ることのできない、それぞれに固有の特色が見えてくることは言うまでもない。だが賀川の世界には、単にキリスト者としての固有性とか独自性としては言い尽くせない、きわめて顕著な特質が感じられるのではなからうか。それは確かにひとつには、彼がその活動舞台を教会や狭義のキリスト教世界の内部に限らず、大衆伝道や社会的実践活動の場面に求めたことによるであろう。だがそれだけでなく、そこには、彼の世界のありようの根幹に触れてくる、さらに根本的な理由があるように思われる。

そもそも信仰者というものは、いかに強靱な精神の持ち主と見えても、その内面にはさまざまなこころの低迷や信仰の起伏などが存在するのが常である。しかしながら賀川という一個の信仰主体は、まさに火薬を込められた弾丸のように、いささかの迷いも逡巡もなく、ひたすら目的に向かって疾走するかのように見える。それはまさに、彼自身の表現をもってすれば、宇宙という大いなる

生命を浄化するために不断の「白血球運動」に従事する、一個の生命体と呼ばれるにふさわしいありようであった。そして、賀川をこのような特異な生き方へと駆り立てた力、その生への起爆剤は、理性や人格などと規定される以前の、一個の生命体としての人間のもつ、一種の原初的な生命力ともいうべきものではなかったか。

ところで、宗教の本質を、教義や教会制度などではなく躍動する生命的な活動そのものに見いだすという、一種の精神主義的な姿勢それ自体は、近代日本のプロテスタントの間に広く見いだせる傾向である。しかしそこでは、内村鑑三の場合がそうであるように、「生命的」ということは、教義や儀式、あるいは教会組織等として客体化された外的な要素にのみ依存する、形式化し形骸化した信仰との対比で語られるのが一般的である。そこでは「生命」とは、かたちに息を吹き込みこれを立ち上がらせる霊的な力であり、生きた信仰の原動力である。しかしながら賀川における「生命」とは、そのように何ほどか“精神化”され、象徴的・比喩的な意味を込められた生命ではなく、まず端的に、生物体として宇宙の中に存在するいのちそのものであった。

ところで昨今、こうした意味での「生命」を生いのちの原点、世界解釈と行動の原理とする思想傾向が大正時代に存在したことに着目し、「生命」を「スーパー・コンセプト」として当代の思潮に光を当てなおそうとする試みが注目を集めている<sup>(1)</sup>。今日、遺伝子工学に代表される生命関連の技術の飛躍的な発展や、死をめぐる医学的・社会的問題のクローズ・アップなどにより、「生命」が新宗教や超常現象などまでも巻き込んで、時代の「スーパー・コンセプト」に押し上げられつつあるが、論者によれば、「生命」が思想界を席卷した時代はかつての日本、すなわち大正期にも存在した。同論者はこの現象を「大正生命主義」と名づけ、生命という概念をキー・ワードとして当代の思想・文化をとらえなおすことを提唱し、あわせてそうした作業が今日思想状況を反省し、新たな「生命」思想を生み出すことにもつながるであろうと述べている。その中で賀川豊彦の名も、この大正生命主義の多様な発現形態のひとつとして言及されているが、じっさい、神を大宇宙の生命と体認し、その意思を自己の生命の中に生かし込むという賀川のめざした生き方は、単に賀川ひとりのものではなく、時代の思潮に棹さすものでもあったことが知られる。こうした知見に教えられ、このような観点から賀川の世界に光をあててみることは、いきなりキリスト教史の中への位置づけやそこでの評価を試みるよりは、賀川固有の世界を内在的に理解する方法としてはいっそう有効であり、かつ新たな現代的意義の発見にもつながるのではないかと思われる。

賀川豊彦を、同時代の他のキリスト者から際立たせている所以のものをその世界のうちに探るなら、賀川においてはその生いのちの原点が、生身の人間としての始原的な生命力ともいうべきものがあったことにある。一般にいわれる典型的なキリスト者と目される人々の場合、信仰的生いのちの原点は、基本的には聖書あるいは教義体系として外在化された神意との緊張のもとに置かれている（あるいは、そのようにあるべきものと受けとめられている）。すなわち、聖書において啓示された神への信仰告白が、また特にプロテスタント主義の場合には、イエス・キリストの十字架上の死による罪の贖

いへの信仰告白が、その信仰的生を支える究極の支点とされる。それにたいし賀川の場合、その生を支えるものは、基本的には彼自身の内部に直観される根源的な「生命」感覚ともいべきものにあった。賀川が自らの宗教を「生命宗教」と呼び、宗教とは「生命の上に描かれるべき芸術」であるなどといっているところからも、「生命」ということばの意味するものを探ってみることは、賀川の世界の特異性に近づくための重要な鍵となりうるのではないかと思われる。そのような見通しから、いま賀川における「生命」の思想の内実を少しく吟味検討し、これをキー概念として彼の信仰の世界を再構成し、あわせて、彼の日本キリスト教史上における意義について若干の考察を試みたいと思う。

## 2. 「生命の不思議」の体験

賀川の入信やその後の思想形成の経緯については、われわれはすでに伝記的研究によって多くを知り得ている。だが本論のさしあたっての関心は、彼の世界の成り立ちについて、もう少し別の角度から問うてみることにある。すなわち、彼をその固有の信仰と実践の世界へと導き、かつ常にその活力源となった原体験ともいえるものがあるとすれば、それはどのようなものであったのか、あるいは、彼の信の世界がどのような根本動機の上に構築されているのかを問うことにある。

初期の自筆資料<sup>(2)</sup>および長男の賀川純基氏の談によると、洗礼を受けてから貧民街に身を投じるまでの間、賀川には死生をめぐるきわめて深刻な葛藤、低迷の時期があったと推測される。この時期賀川は、肉体の病により文字どおり生死の境をさまよう体験をしたのみでなく、自死についても思索をめぐらせていたことをうかがわせる文章を書き残している<sup>(3)</sup>。まずその辺の消息を見てみよう。

初期資料その他から推察すると、賀川は明治41年頃、一度自殺を企てたことがあったようである。その理由はさだかではないが、賀川純基氏によれば、何らかの具体的な挫折体験が原因だったのではなく、多感な自我をもてあましたり、人生に空を観ずるといような、広義の思想上の悩みによるものであったらしい。(ちなみに、一高生藤村操が華嚴の滝から投身自殺を遂げたのは、その五年前のことであり、世はいわゆる知的青年の煩悶の時代、大正教養主義への前夜であった。)氏は、賀川がスラムでの捨て身の生活に入ったのは、「死ぬつもりで」入ったのではなかったか、すなわち、ひとたび自我に死んだ者が、この時を境に神に“引こづられて”生きる道へと再生したのではなかったか、と、深い洞察にみちた指摘をされている。では彼をして死の淵から脱出させたものは何であったのか。

このことについて賀川自身は、一度この世に絶望して自殺まで企てた者が再び「生」を肯定するというのは不徹底ではないかという田中王堂の批判に答えるかたちで、自分が生を肯定する立場に到達したのは、カーライルの永遠の否定から永遠の肯定へ、ヘーゲルの正、反、合のような「論理

の推移」によるのではなく、「[生命] そのものの不思議を見たことに起因する」(『生命宗教と生命芸術』、『賀川豊彦全集第4巻』54頁、以下『全集4』・54と略記)と述べている。一度否定された生が、「生命そのものの不思議を見た」ことにより再び肯定されたと言われているのは、賀川の世界を知る上で、きわめて意味深いことに思われる。では「生命の不思議を見た」とは、どのような体験であったのか。

この関連で注目されるのは、明治40年、賀川十九歳の年の夏のこと、肺結核で死に瀕する中で、突然、光明が全身をつつむという感覚が彼を襲ったと伝えられていることである。横山春一著『賀川豊彦伝』はこの体験を、パスカルや綱島梁川の見神の体験にも似た体験として紹介し、その後賀川は、奇跡的に病の危機を脱したと記している<sup>(4)</sup>。この他にも賀川には何度か「神」との神秘的ともいえる交感の体験が生じたらしく、しかもそのような体験がしばしば「光」の中で生じたとされている。たとえば賀川自身、パウロの祈りについて紹介したくんだり、「瞑想と黙示の中に浸ることは嬉しいことである。私はさう云ふ経験の中に幾度も光を受けた覚えがある」(『全集2』・27)と記している。また、聖霊の経験について述べた中では、自分も数回、宗教的歎喜を感じて光明に浸った経験を持っており、それは「言葉に尽すことの出来ない法悦」(『全集3』・334)であったと述べている。深層心理学の教えるところによれば、神的なものとの深い合一の体験には、しばしば光のイメージが伴うという。そうした知見に教えられるとき、賀川は一種の「神秘家的資質」をも備えていたことが知られる<sup>(5)</sup>。これらのことから、賀川のいう「生命の不思議を見た」という体験も、それが彼の生き方に決定的な転換をもたらしたことを考えあわせるとき、単に理性のレベルで生命の不可思議さを認識したという類いのことではなく、深く魂の内奥の霊的次元に根差した体験、いうなれば、「神的なもの」としての「生命」との根源的な出会いの原体験であったとみるのがふさわしいのではないかと思われる。死から生へという、この時期の賀川に生じた一連の体験は、文字どおり肉体の死の淵からの生還であったと同時に宗教的霊的な再生の体験でもあった。そして、この稀有な体験が、それ以後の彼の驚異的な生を支え続けた活力源ともなったのである。

こうして、「生命の不可思議」、「実在の驚異」への根源的な畏怖の念を原点として、キリスト教のみならず物理学や生物学、進化論なども含む、広範な分野にわたる当代の先端の学問を貧欲に、精力的に涉猟し、それらを自在に用いて自らの思索の結果を学問的体系へと構築していき、あわせてその確信にもとづく多様な社会的実践活動を繰り広げていった——、これが、自ら「生命宗教」と名づけた賀川の信仰世界の基本的なありようであったと考える。ではそのようにして開かれた彼の世界の内実はどのようなものであったのか。

### 3. 「生命」・「宇宙」・「神」

賀川の世界において、「生命」とともに重要な位置を占めるのは「宇宙」である。そして賀川の

キリスト教理解の独自性は、それが「生命」と「宇宙」という、聖書の世界とは異質な思想を基軸として展開することにあった。「生命」、「宇宙」・「神」の三者は、賀川の信の世界の核心を構成する根本契機であり、賀川の信仰のありようを解き明かそうとする者は、これらそれぞれの内容を吟味するとともに、これら三者の相互のかかわりはどのように考えられていたのかについて問わねばならない。

ところで、ここで改めて確認しておきたいことは、賀川における思想化の方法的特質ともいうべきものである。すなわち、多くの場合、賀川によって語られることの本質は彼の霊的体験に根ざす確信であって、“信仰の形而上学”ではないということである。彼には表題に「瞑想」の語が冠せられた四つの連作がある。賀川の宗教的著作の精髓ともいわれる『神についての瞑想』、『キリストについての瞑想』、『十字架についての瞑想』、『聖霊についての瞑想』の四部作は、賀川の講演の筆録であるが、それぞれに自筆の序文が付けられている。それによると「瞑想の森に分け入ることを覚えた私」は、真夜中、白昼、曙、黄昏などのいかなる時にも、また電車の中、獄房、路上などのいかなる場所にも、瞑想への扉が開かれていることを知る。賀川が祈りの人であったことはよく知られているが、彼はまた瞑想の人でもあった。彼のいう「瞑想」が具体的にどのようなものであったのかについては、必ずしも多くが語られておらず、興味をそそられるところである。純基氏によれば、賀川は自然の中で瞑想することが非常に好きで、多忙な生活にもかかわらず旅行にはよく子どもたちを伴い、そのような時を過ごすことがあったという。彼の「瞑想」は、たとえば座禅のような、いわゆる修行としての行為ではなかったようであり、黙想の中で、神やキリストなど信仰上の諸テーマについて沈思したのであろうと想像される。また賀川自身も、瞑想に浸ることは喜びであり、神につき宗教的生活について瞑想していると、「一時間でも二時間でもちっとしておられる」などとのべている（『全集2』・378ほか）。

詩的ともいえる表現で書かれた上記の文章は、一見すると学問的体系のようなこれら四部作が、実はいわゆる神学書として読まれるべきものではなく、「瞑想」の中に自ずと湧き出る想念を基軸として構成された体のものであることを暗示しているように思われる。そしてこれは、賀川の他の信仰著作にも通底する方法的な特質であったのであり、このことは彼の著作を読み解いて行く上で押さえておくべきことであると考えられる。従って、賀川の著作の多くは、それを客観的な論理のことばとして受け止め、解釈しようとするとき、その真の姿はわれわれの手元をすり抜けてしまうのである。本来、深い霊的次元での体験にかかわることは、言語によって伝え、概念によって説明し尽くすことの不可能な質のものではなかろうか。それゆえわれわれはそこに、論理の整合性を探ろうとするのではなく、その内的世界にあたう限り寄り添う仕方、賀川が、自らの根源的な体験に根ざす信の世界をいかにして言語化し伝達しようとした渾身の努力のあとを検証することをとおして、その真相を共感的に読み取ることを求められているのである。

いまこうしたことを念頭に、「生命」、「宇宙」、「神」の三者を軸に彼の信の世界を再現すれば、

その基本は以下のように押さえることができるであろう。

「生命」について彼は次のように言う。

「私は先づ「生命」といふことから出発する。

それは「力」である。

それは私の内在する。その癖「私」それ自身では無い。私はどうしても、「生命」それ自身が私が支配して居るとはよう考え無い。寧ろ、「生命」が私を支配して居るように感じるのである。そこに私は生命の神に跪拝するのである。」(『全集4』・51)

内なる「生命」の力の実感には彼にとっての「出発点」である。だがその力は、己れの意思のままになる力ではなく、逆に彼を支配する力として実感される。このように、賀川における内なる「生命」感覚の内実は、自己の生命がより大なる「生命」の配下に置かれているという実感であった。従って、彼の根源的な畏怖の対象としての「生命」とは、彼自身のものでありつつ、同時に個としての生命を超えた、ある普遍的な「生命」でもあった。そして彼の内なる「敬虔感覚」は、この大なるものを「生命の神」として彼に畏怖の念をおこさせ、彼をしてその前にひざまずかせるのである。彼は言う、「かくして、私は「生命」を私の「神」として信じて居るのである」(『全集4』・51)。

ここでわれわれは彼のいう「生命の神」とは何かについて、いまいし立ち入ってみなければならぬ。キリスト教信仰の立場からすれば、「神」が語られるとすればそれは当然、超越者であり万物の創造者である聖書の神であることが予想されるであろう。だが賀川においては己れの生命を超えた大なるものは、「神」として跪拝されつつも、同時に「大宇宙の生命」、「宇宙生命」として感受され畏怖されるなにかであった。ではそのようなものとしての「生ける大宇宙」は「神」そのものであるのか、あるいは「大宇宙の生命」は、さらにその背後にある万物の創造者としての神を指し示す徴なのであろうか。まず彼自身のことばに聞こう。

「大宇宙が生きている。この生きている宇宙は、目的を持ち、順序を持ち、選択をなし、実現に向って事業を進展せしめ、自由に力をもって働く生命あるものだと思ってくれば、それが宇宙を貫き給ふ全能者でなくて何であらう。それを神と呼ぶのに、何の不思議があらう。」(『全集3』・342)

賀川は「大宇宙」を意志的な生命体と受け止め、そこに「宇宙を貫き給ふ全能者」としての神を見る。この、「宇宙を貫き給ふ全能者」という表現の意味するものは、宇宙の創造者、支配者としての神ということとは異なるであろう。そこでは、神と宇宙の間には創造者と被造物という質的な断絶はなく、両者の関係はより緊密であるように見え、あたかも「全能者」は宇宙に充満する者であるかのようである。また時には「宇宙生命、即ち神の力」という表現も見受けられるように、両者はほとんど重なり合うかのようには見え、さらにある所では、「神」と「宇宙」ないし「宇宙生命」の語はないまぜとなり、ほとんど区別なしに用いられているのに出会う。だがなおそ



れは、宇宙そのものが神であるという理解とも別物であった。「神は宇宙を衣としてまわれ、宇宙の神の衣装としてい給ふ」とか、「神がその意識を発表して宇宙ができた」などという表現が示すように、両者は限りなく接近しつつも、なお神は神であり宇宙は宇宙なのである。こうした賀川の独特な神観念には、若い日における「生命の不思議」としての神的なものの原体験の、ロゴス的な展開をみることができるであろう。

「生命は客観、主観を貫いて支配し、成長する。生命のみが絶対と云ふ可きものである。「私」は生命を直観するが、「私」が生命そのもので無いことをも直観する。即ち生命は私に内在するが、それは世界に於ても作用して居るのである。生命は即ち私の神である」(『全集4』・82)。

このように、「生命」として内に直観されつつかつ我を超越する「神」は、内界も外界も含めた全宇宙を貫く力として、宇宙の展開をとおして己れを示現する。人は、そのようなものとしての宇宙の中で、我を貫いて働く生命の力を体認しつつ、「生命の神」の意志を自らの生命の上に体現する者となるべく生きるのである。それゆえ、宗教とは「生命の上に画かるべき芸術」(『全集4』・84)なのである。

こうした理解のもとでは、物質世界もまた、無機的機械論的な自然ではなく、神的な生命の力のあらわれと受け止められていた。彼はいう、かつて人間の感覚が鋭かった時代には、物質はただの物質ではなく、霊的な力の表現と受け止められていた。ところが、人間の感覚が鈍ってくるとともに、物質の見えざるものの言葉としての意味は見失われ、物質は単なる不透明な物体と化した(『全集4』・52)。そのように言いつつ彼は、現代の物質世界の研究の進展は、物質が「力の世界」の現れであることを再び明らかにしつつあるといい、たとえばエネルギーや力に関する物理学の最新の成果が示す世界像などをも、自らの生命的宇宙観の中に取り込もうとしている。そのような発想の当否や試みの成否について問うことは、ここでの課題ではない。さしあたっては、こうした賀川の世界観は、概念的なことばで規定するなら、いわば生命一元論とも称すべき体のものであることを指摘しておきたい。

では、神的生命を自らの生の中に生かし込むとは、具体的にはどのような生き方を意味するのだろうか。

#### 4. 愛と人間イエス

賀川の宗教活動と社会的実践とを一貫するものは、魂の救済と生活の解放とは一体となって行われるべきものであるという主張であった。そして、社会革命のみにとられるマルキシズムへの対抗をも十分に意識しつつ、愛こそが世界の根本原理であり、社会は愛において構築されるべきことを説いた。そこで次に、前節の「生命」、「宇宙」、「神」の三者と「愛」とのかかわりはどのように考えられていたのかについて問わねばならない。

彼はいう、生き物がその生命を保持しうるのは、宇宙意志の中に生存競争以外に「愛と保護」が加わっているためである。恋愛が地上に花を咲かせるのも、「大宇宙の意志によって生れたもの」である。同様に、人が罪人や敵をも愛し得るのは、「見えざる宇宙の大なる衝動」によるのである。言うまでもなく、「敵を愛する愛も、罪人を愛する愛も、凡て神から出づる愛」である。だが、「恋愛が深き生命の血管を通じて目覚める」ように人が「罪人を愛せよとの愛に到達する」のも、「我等の知り得ない宇宙意志の進行」によるのである（『全集7』・98）。すなわち、信の世界において「神」が「大宇宙の生命」として体認されたことと対応して、実践の世界では、「神の愛」は「宇宙の大なる衝動」として感得されるのである。いうなれば、「生命の神」の力は、実践的には「愛」として発動する。「愛」は「個体を貫く宇宙意志」（『全集7』・119）であり、自己の生命の中に自己を超えた大いなる生命の充満を感じ、その前にひざまずき、その力に衝き動かされて生きる者は、宇宙生命としての愛を自己の生のうちに生かし込む者として生きるのである。

さて「愛は、（大宇宙という）一つの有機体組織の、一つの働き」（『全集7』・124）であり、「愛とは、自分が細胞分裂すること」である。そこでは愛するということは、宇宙の力を受け、宇宙の展開の方向に沿う行為であるから、それは、愛の実践を妨げる内なる肉の思い、自己愛との葛藤の中で実践されるごときものではない。そこには、「わざとでない、きわめて自然な犠牲の愛」が示される。人は神によって仕組まれた「設計」に従って、自己の内的な衝動に押し出される仕方で愛するのだからである。だが、たとえそれが神の設計になる、宇宙進歩の方向に沿う行為であろうとも、そうした境位は生身の人間の容易に到達しうるところではないであろう。たとえ愛が、宇宙の奥深く潜む「神の設計」であろうとも、一般の人間にとっては、有機体組織の自然な展開のような仕方で愛を結実させるなどということは不可能だからである。ではそのような愛の実践はいかにして可能となるのか。

賀川は、そのような意味での愛がこの地上においてあますところなく具現された姿を、人間としてのイエスの中に見た。彼はいう、「黒土を破った青芽に、露がそゞがれ、茎が伸び、花が綻び、そして結実の秋が来たように、人間の歴史に一つの結実が見せつけられた。それはほかでもない。ナザレの大工イエスに於て、宇宙の底にあった不思議な愛の霊力が、露はに表面に出て来て、最も貴い人間の結実を示してくれたことである」（『全集3』・191）、「キリストについての瞑想」序より）。この詩的ともいえる表現に言い尽くされているように、賀川にとってイエスこそ、「宇宙の大愛の結実」、大宇宙という生命体に仕組まれた神の愛の完全な体現者であった。

## 5. 「イエスの模倣」

賀川にとってイエスとは、人間として神との真の合一を体験し、神から受けた肉の体において「生命の神」の力を表現し尽くした「神の芸術」作品であった。そして賀川はそこに、「生命芸術と

しての美」の極致、「秀れた宗教の完成」を見た（『全集1』・367）。そこで人に求められることは、そのようなイエスを範とし、イエスに「少しでも近づく」べく歩むことに見いだされることとなる。「私は理屈は云はぬ、私はどうかしてイエス・キリストのやうな生活がしたいと思って努めている。『イエスの模倣』をして、イエスの聖足の跡を踏んで行くのが基督教である」（『全集1』・221）。

こうして、賀川におけるキリスト教的実践の根本原理は、「イエスの模倣」に据えられることとなる。イエスの言行に関する『新約聖書』の記述の熟読玩味をとおして、いかにしてイエスのところを探り、それを己れの生の上に実現することに努める——、これが賀川がその生涯をかけて目指した境位であったと思われる。「イエスならどうするか」——、賀川純基氏によれば、これが、労働問題を始めとするあらゆる実践的課題に取り組むさいに、賀川が常に自らに課した問いであったという。全てのことを「イエス流にしたい」というのが、彼のあらゆる実践活動を支える原点であったのである（賀川純基氏談）。

さて、プロテスタント主義一般の理解がそうであるように、賀川もまた、イエス・キリストの生涯の核心を「贖罪」の業に見ていた。「イエス・キリストの宗教の本質は、贖罪宗教の確立にある」（『全集2』・95）。だが本論の冒頭にも触れたように、またこれまで考察してきた賀川の信の世界のありようからも当然予想されるであろうように、賀川における贖罪の受けとめ方は、正統プロテスタント主義の理解とされるものとはやや趣を異にするように思われる。では賀川においては、イエス・キリストの贖罪はどのように理解されていたのか。

賀川は、自分のイエス観が「イエスを人間の水準に引き下げ」る一種の冒瀆であるという非難を一般のキリスト教徒から受けていることを認めながら、逆に彼らは「イエスの十字架と復活のみを説いて、人間的部分をかえりみない」と批判する（『全集1』・318）。あくまでも「人間イエス」の模倣に徹しようとする賀川にとって、“神の子イエス・キリストの十字架上の死による人類の罪の贖い”という福音のみに安住しようとするキリスト教は、「きわめて理屈っぽい」教条主義的な宗教に過ぎなかった。そうした賀川にとっては、キリストの贖罪もまた、福音宣教の根本内容であるよりは、人間イエスの生涯における具体的な働きの一部であり、その意義もまた、第一義的にはそうした視点から受けとめられた。すなわち贖罪とは、他者の罪科にたいして連帯責任を負い、罪あるものを再生させることである、というのが贖罪にたいする賀川の基本的な理解であった。彼はいう、「キリストが多くの罪人の身代になって死んだというのは、約束手形を裏書きしたために連帯責任を持つようなものである。之が社会的連帯責任である」。東京市には毎年、不良少年だけで九千人もいるが、誰がそれに対して責任を持つか？「不良少年を造り変えようといふのが贖罪の意識である。キリスト教の贖罪意識はそれをいふ」。だが普通の人間は、自分に関係のない者に対しては連帯責任を負おうとはしない。そうした中でキリストは、「世界のあらゆる人の罪科に対して責任を感じられ、自ら進んで磔にかゝられた」（『全集3』・381）。イエスにおいてはその生涯そのものが贖罪愛の実践の生涯であり、イエスが十字架刑を甘んじて受けられたのは、そうした自己

の生き方を死にいたるまで貫徹するためであった。真に人を愛するにはこのように、生命を賭してその罪悪までも引き受け、その人を神の高さにまで押し上げていかねばならない。それには「人の為に喜んで死ぬ気がなければならぬ。それがイエスの運動」である（『全集3』・78）。「自分が死を捧げて人に尽すそのこと」、これが「真のキリスト・イエスの道」なのである（同・97）。

さて、贖罪の原義がこのように理解されるとすれば、それは単にイエスのみのものではないであろう。贖罪愛に生きることは、「イエスの模倣」を目指す者にとってもまた究極の課題であらねばならない。彼はいう、原始、人間は贖罪について「無意識」で、人を殺すことを何とも思わなかった。次いで、身代わりの羊を捧げる「半意識」の時代を経て、終にキリストによって「愛の極致としての贖罪愛」が示されたことにより、「キリスト以後は全意識に入った」（『全集3』・104-105）。いうなれば、賀川にとって人類の歴史は、宇宙の奥深く潜む見えざる神の愛が人間をとおして次第に己れを顕現していく過程であり、それがキリストの贖罪において極限のかたちをとって現れたのである。

このように、人間における神の愛の究極の姿がキリストによって現実となった上は、人はもはや「半意識」のレベルに止まっていることは許されず、贖罪愛の精神をこそ、社会改良の根本原理とせねばならない。「キリストは、人間の考へられないやうな救の愛を事実として、意識し、実行し、教へたことによって、神の姿そのまゝである。この道を外にして、理想の国は絶対に実現しない。マルクス主義では美しい愛は生まれない。かうした神の愛を基礎とせねば、社会は到底駄目だ」（『全集2』・292）。ここに、賀川が社会的実践の根本原理を「贖罪愛」に求めた根拠を見いだすことができるであろう。

## 6. 宇宙悪の問題

賀川の世界において、もうひとつ重要な意味を持つものは「宇宙悪」である。最晩年に公にされた『宇宙の目的』の「序」によれば、彼は十九歳の時から「宇宙悪の問題」と取り組み始め、爾来、「いそがしい日本の社会運動の暇をぬすんで「宇宙悪とその救済」を研究しつづけた」（『全集13』・291）。実際、賀川においては、神意の実現に逆行する力が、「罪」としてよりもむしろ「悪」として問題にされていることは一考を要する問題である。そこで最後に、賀川の世界全体の中で、「宇宙悪」とはどのような意味を負わされているのかについて触れておきたい。

これまで、賀川における信の世界が、「生命」及び「宇宙」を軸として成り立つことをみた。ところで賀川が生涯にわたって心血を注いだもうひとつの仕事は、この「生命」を根本原理とする壮大な世界観の構築を試みることにあった。彼は言う、「神御自身の力」としての「生命」は、二つの方向に向かう。すなわち、「時間的には生命として飛躍し、空間的には物質として現れる」（『全集1』・143）。すでに触れたように賀川は、物質世界を無機的な死物としての単なる自然では

なく、神的な生命力のあらわれと受け止めていた。同様に、人間以外の生物に関しても、そこには一種の合目的性をもつ心が共有されているとした。そして、物質界生命界のすべてを覆う全宇宙が、総体としてひとつの神的な目的の方向に向かって進展しているという、壮大な目的論的宇宙像を構想した。そして物質界から生体界に及ぶ、あらゆる分野に関する最新の学問成果を驚くべき旺盛さと貧欲さで摂取しつつ、それらを独自の目的論的見地から再統合して、固有の世界観の体系を構築しようとした。最晩年の労作『宇宙の目的』（『全集13』）は、その集大成ともいうべきものである。いまその試みの成否を問うことは本稿の課題ではないし、また、現在の学問水準に照らしてその当否を論ずることは、キリスト者賀川を理解や評価にとって本質的な問題ではないであろう。本稿のさしあたっての関心は、彼固有の宇宙観の中で「宇宙悪」がどのような意味を負わされていたのかということにある。

古来、悪の起源は不明であるとされてきた。だが、と賀川はいう、「宇宙目的からみれば、悪の起源問題は明白である。それは宇宙目的に到達し得ないことから起るのである。宇宙目的は選択の組み立てによるものであるから、その選択の条件に微細な故障が起っても、悪は発生する」（『全集13』・452-453）。このように賀川にとって「悪」は、「善」なる神に対置される「实在」ではなく、また、大いなるものの意志に抗い、その貫徹を妨げるべく働く力でもなく、生命が進展していく途上に生じる一種の負の状態のごときものと受け止められていた。「悪は实在ではない。・・・生命の内容を創造し、生命を進化せしめんとするに当って悪が感ぜられるのである」。具体的には、「病氣、老衰、不具、廢疾、低能、白痴、發狂、死亡」（原文のまま）などが悪として列挙される。そして、それらが「悪」と見做されるのは、「生命が進化すべきものであると考へられるにかかわらず、変則なものが出来ると考へるから」であるという（『全集4』・61）。

このように、賀川における悪とは、個別者としての信仰主体にとっての実存的な問題であるよりは、むしろ一種の外的な状態ともいうべきものであった。それゆえ悪の問題の解決は、個々のたましいの看取りによってよりも、むしろ総体としての状況の変革の方向に探られるべき性質のものであった。確かに賀川にとって、「愛は夫から妻に、親から子に乗り移る精神」であり、「私があなたに表現する処のもの」（『全集7』・92）であって、血の通わぬ社会の変革をとおして提供しうものなどではなかった。だが少なくとも上述の論理にみるかぎり、貧者と向き合う賀川の視野にあったものは、彼自身と我・汝の関係に立つかけがえのない一者であるよりは、むしろ底知れぬ「宇宙悪」そのものであったのであり、眼前の貧者はいわばその“代表”であったと言えるのではなからうか。宇宙観の構築をめざしてあらゆる分野にわたる学的成果を貧欲に渉獵したように、賀川はまた、宇宙悪の探求に関しても異常なまでの執念をもって臨んだ。『貧民心理の研究』はその現れのひとつと言えるであろう。思うに、同書と取り組んだ時の賀川の念頭にあったものは、恐らく宇宙悪の現れとしての貧民の惨状そのものであったのであり、個々の人間自体は背後に退いていたのではなかったか。同書執筆の動機や目的が、宇宙悪を見極めること以外のなにものでもなかったとし

でも、(実践面のことはさておき少なくとも論理の世界の中では) 現実に貧民を構成している、人格としての個人々人へのまなざしを欠いたゆえに、同書が激しい批判に晒される結果となったことは、賀川自身にとってのみならず、彼の遺産を継承しようとする人々にとってもきわめて不幸なことと言わねばならないであろう。

## おわりに

以上で、「生命」および「宇宙」を軸として展開する賀川の信の世界の基本はほぼ押さえ得たと思う。冒頭に、賀川の世界が「大正生命主義」と名づけられる思潮に棹さすものであったことに言及したが、賀川の世界をこのように再構成することが許されるとすれば、それは、文化創造の源泉を普遍的な「生命」の発現に見、宇宙のこころを感じて生きることを目指す「大正生命主義」と、共通基盤に立つものであると見ることができよう。実際、「大正生命主義」の提唱者も、「生命」が超越的な原理と結びつくとき、「神」や「宇宙」「万物」などのあらゆる観念、あらゆる実感を容れる器<sup>(6)</sup>となることを指摘しており、賀川豊彦の社会的実践活動を、「キリスト教が、いわば「生命主義」的な社会運動として発現した例<sup>(7)</sup>」として位置づけている。いま、賀川を「大正生命主義」の流れの中に位置づけることは、本稿の直接の目的ではないが、「大正生命主義」という考え方に触発されつつ賀川の世界に光を当ててきたので、その視点から賀川における「生命主義」の特質を指摘して本稿の結びにかえたい。

「大正生命主義」の流れの中に賀川の世界を置いてみると、その第一の特質はいうまでもなく、「生命」とキリスト教の神との結びつきにある。一般に、生の確信の根拠を自己の内部にのみ求める生き方は、恣意に傾きやすく、時には限りない自己肥大や自己絶対化に陥る危険性を孕む。事実、「大正生命主義」の論者も、生命主義は「生命」の自由な発現を求め、創造性に富む反面、散発的で無秩序に傾きやすいことを指摘している。一方、(これも同論者の指摘するところであるが) 逆に「生命」が自己を超えるものを特定の地域や国家、民族、社会などに見いだすとき、そこには常に、全体主義的な生き方と結びつく危険性が孕まれている。そうした中で賀川は、常にその生の指針を、聖書の伝える神意の顕現者イエスの生き方の中に求め、それとの絶えざる緊張のもとに身を置き続けたゆえに、自らの内部の実感される生命感覚を生を原点としながらも恣意性や相対的なものの絶対化に陥ることなく、聖書にもとづくキリスト教的な生き方の、ひとつの偉大な範たりえたのであった。

第二に注目したいことは、「生命」と宗教的原理との結びつきが、彼の生にとって、信仰者のみを持つ不屈の活力の源泉となったことである。すでに見たように賀川は、贖罪愛の実践をとおして、宇宙悪からの社会の救済活動にその生涯を投じた。だが、現実の問題として、宇宙悪などという巨大なスケールの悪の根絶は不可能事であるとすれば、そうした実現の当てのない目的を前にして、

人は無為に陥らざるを得ないのではなからうか。最晩年の賀川は、原水爆の体験を経た宇宙をなお進化の途上にあるものと受け止めて、そのさらなる進化発展を、「宇宙の絶対意志」としての神の手に委ねた。「宇宙に目的ありと発見した以上、目的を付与した絶対意志に、これから後の発展を委託すべきだと思う」。では人はただ拱手してその発展を待てばよいのか。彼は続けて言う、「さればとって、なげやりにせよという意味ではない。私は、人間の意識の目ざめるままに、すべてを切り開いていく苦闘そのものに、超越的宇宙意志の加勢のあることを見いだすべきであると思う」（『全集13』・454）。絶対意志のもとに置かれた人間は、ただなすことなくその発展に身を任せるのではない。彼は超越的意志の「加勢」を信じるがゆえに、宇宙悪との戦いという果てしない苦闘に従事することができるのである。この姿勢は、歴史の進歩に夢を託す単なる楽天主義とは異なる。ここには、究極的なものへの信が、倫理的努力にとって無尽蔵の活力源となるという構造を、鮮やかに読み取ることができるであろう。

以上見てきたように、賀川の信の世界は、神の観念を初め信仰告白の核となる諸契機の受け止め方などにおいて、少なくとも正統プロテスタント主義の通念とは合致せぬ部分が少なくない。従って、彼のキリスト教理解そのものは、キリスト教史の中でしかるべき評価を与えることは困難であるかもしれない。しかし、単に賀川のキリスト教を、正統プロテスタント主義の教義理解を尺度として評価裁断するだけでは、そこからは何の生産的なものも得られないであろう。「生命」の意味が多様な角度から改めて問い直されている今日、われわれは、賀川が根源的な“生命体験”をとおしてキリスト教を主体の中に真に確たるものとして根づかせたことをこそ、日本キリスト教史におけるひとつの新しい創造として位置づけるべきであろうと考える。

本稿の作成にあたってお世話になった、賀川純基氏ならびに賀川豊彦記念松沢資料館の方々に、心より感謝申し上げます。

#### 注

- (1) 鈴木貞美『大正生命主義と現代』、東京、河出書房新社、1995  
同『「生命」で読む日本近代』、東京、日本放送出版協会、1996など
- (2) 米沢和一郎・布川弘編『賀川豊彦初期資料集』（『賀川豊彦関係資料双書5』）、東京、緑陰書房、1991
- (3) たとえば、前掲書 p. 233-387収録の「生存価値論」など
- (4) 横山春一『賀川豊彦伝』、東京、キリスト新聞社、1951、p. 40
- (5) 初期の日記にはこの他にもいわゆる「見神」を思わせる記述が見られる。
- (6) 鈴木貞美『「生命」で読む日本近代』 p. 266
- (7) 鈴木前掲書 p. 157-158

## 賀川豊彦試論

### 参考文献

黒田四郎『人間賀川豊彦』，東京，キリスト新聞社，1970

武藤富男『評伝賀川豊彦』，東京，キリスト新聞社，1981

黒田四郎『私の賀川豊彦研究』，東京，キリスト新聞社，1983

米沢和一郎編『人物書誌大系25・賀川豊彦』，東京，日外アソシエーツ，1992

隅谷三喜男『賀川豊彦』，岩波書店，1995（同時代ライブラリー版）

その他、『賀川豊彦全集』（東京，キリスト新聞社，1962～64）に収録の，武藤富男による解説